

令和 6 年度 名進研小学校自己評価

項目	方針	具体的方策	自己評価
重点目標	「成長」－児童の成長・教師の成長・組織の成長－ ①合格者数(東海中合格20名目標) ②志願者数(200名目標) ③新1年生(90名充足)	①深度の異なる習熟度別授業におけるきめ細やかな指導における基礎学力の定着と個別最適化。進学塾名進研との連携強化による学力伸長 ②イベントへの参加者増のため、SNS・WEB広告等での情報配信と、内容の充実 ③専願者に向けた受験アプローチと入試の複線化	「成長」をキーワードに、校内組織の再編を進めた。管理職（校長・副校長・教頭）のもとに、主幹級・主任級・担任級・副担任級という明確な職階を設けることで、情報共有や部署間の連携が強化され、組織全体の活性化に一定の成果が見られた。一方で、初年度であることから、指揮命令系統の不明瞭さにより、各役職が十分に機能しない面もあり、今後の組織運営の改善点として捉え、次年度の組織改革に生かしていく。 具体的な成果として、①の合格者数では、東海中学に過去最多となる16名が合格し、目標の20名に迫る結果を残した。また、南山中学女子部でも過去最多タイの6名の合格者を出すことができた。一方で、②の志願者数は、少子化および名古屋圏の転出者増加の影響を受け、前年を下回った。③の新1年生の入学者数も90名に届かなかった。 こうした状況を踏まえ、今後は入試の改革や教育の特長をより積極的に発信し、志願者数の増加を図る。本校の教育理念に適した児童の獲得に向けては、一定水準の選抜を行う姿勢を貫いていく。
教務総務係	①基礎学力の定着と中学受験に対応できる学力の伸長を目指すとともに、各自の夢の実現に向けて、意欲的に実現できる精神力や行動力の育成を図り、思考力・判断力・表現力を育成する ②ヒト・モノや実社会に触れる体験活動を実践する ③教育活動を通し、主体的に問題解決を図る能力の向上と問題感知力を育成する ④英語教育のさらなる充実を目指す ⑤学校での活動や行事を通して承認場面を増やす。また自主的・自律的な子どもの育成を目指し、児童の自己有用感を高める ⑥本校に合った「個別最適化」を検討する	①宿題の取り組みや習熟度別学習を見直し、より学力定着、学力向上を目指す。宿題の取り組みで、一人一人が課題を見つけ、課題解決していけるように6年間を通して一貫性のある基本指導の軸作りをする ②体験的な学習を取り入れ普段とは違う経験をさせることにより、豊かな心を育成をする。サマースクール、出前授業、校外学習といった機会を活用する ③総合的な学習「プロジェクト」で各学年に与えられたSDG s の課題に取り組む中で問題感知と問題解決能力の向上を図る ④「聞く」「話す」だけでなく、「読む」「書く」を各授業で充実させるために、個にあった習熟度別クラスへの展望を描く ⑤キャリアパスポートを充実させる。各行事で児童には反省を書かせ、フィードバックとして保護者にもコメントを書いてもらう。承認場面を増やし児童の自己有用感を高める ⑥一人一人の学習状況を把握できるモノグサなど個別最適化学習アプリやシステムを活用する。 ・宿題の取り組みや習熟度別学習を見直し、より学力定着、学力向上を目指す。各学年の現状を学年団と相談し、名進研小学校のならではのストロングポイントを検討する 低学年：学習規律の定着 学習に取り組もうとする児童の育成 中学年：自主学習の定着 自分で学習の時間を見出し、課題に取り組む児童の育成 高学年：個別最適化学習の定着 自分の結果を分析し、自分に必要な課題を見つけ取り組む児童の育成	方策である「6学年を通した一貫した基本指導軸の構築」は、提案段階には至らなかったものの、S授業の運営や宿題の取り組みせ方は、主任主導のもと各学年で実施された。S授業の編成は学年ごとに、実態に応じた対応が確認された。教務分掌に関する協議を十分に行えなかったため、今後は議案提出の早期化や臨時係会の設置により改善を図る。学力向上のために、進学情報室のデータ活用や、S授業マニュアルの継続実施も行う。 サマースクールでは出前授業が中学年以上で倍増し、体験学習が充実した。今後は年度初めに実施日程を提示することでさらなる向上を目指す。 探究活動では学年ごとに課題を設定し、学校祭で成果を発表できたが、テーマの難しさやSDGsの変化への対応が課題として挙げられた。 6年生では中学を見据えた習熟度別授業が行われ、個に応じた指導が成果を上げた。今後は教員数の確保やクラス編成基準の明確化が必要である。 保護者からのコメントも児童の自己有用感向上に寄与したが、未提出家庭への対応が課題であり、回収率向上策が求められる。 個別最適化の実施は限定的であったが、今後は児童自身が課題に気づき取り組む仕組みの構築が重要であり、教育研修係と連携して次年度以降のプロジェクト化を検討している。
入試広報係	①各種イベントを通し、認知度の向上を目指すとともに、信頼度・安心感のさらなる向上を目指す(ブランド力の向上とファンの醸成)	①イベントの質を上げることで志願者を増やし、私立小学校という選択肢を世間に広げる。InstagramやLINEを使った広報を展開し、顧客を意識した投稿を行う	各種イベント終了後のアンケート等から参加者の満足度は高く、イベントの質は向上している。一方で、私立小学校という進路の選択肢を広く世間に発信する取り組みは十分とはいえず、課題が残った。Instagramの投稿数やフォロワー数は順調に増加しているものの、その伸びがイベント参加者数の増加に直結しておらず、広報活動と実際の集客との間に乖離が見られる。今後はSNSの活用とイベント動員との関連性を見直し、より効果的な情報発信や広報戦略の構築が求められる。次年度以降は、ターゲット層への訴求力を高める内容の充実や、投稿タイミングの工夫など、実効性のある広報施策を検討していきたい。
教育研修係	①生きる力につながる 21 世紀型能力を育むカリキュラムマネジメントを推進し、授業力・指導力の向上を図る ②教務総務と連携し、本校に合った「個別最適化」を検討する ③情報モラル教育と教育の質を向上させるICT教育の研究と推進を図る	①21世紀型能力が身につく授業・指導について教師間で共通認識を持ち、その認識にもなった授業・指導研修を実施し、公表の場や評価の場を設け、ふりかえりをする ②教務総務と共同する。個別学習アプリの取り組み状況を定期的に確認、分析し、児童一人ひとりに働きかけができるように担任、教科チーフと連携をとっていく ③情報モラル教育の充実を図るために、道徳教育、出前授業、タブレットランクアップ制を見直し、系統的・断続的に学べるカリキュラムを考えていく。ロイロノートなどの学習教材の有効的な使用方法を研修で教員に共有し、授業で児童に展開していく	21世紀型能力の育成に向け、教員間で共通認識を持つことを目的に授業を通じた研修を実施した。研修に参加した教員はその意識を授業に反映できていたが、今後は全教員が共通認識を持っているかを確認する場の設定が課題である。 また、生成AIや低学年向けの学習補助アプリについて検討を行ったものの、新たな個別学習アプリの導入には至らず、現在使用している受験対策アプリ「モノグサ」の継続使用にとどまった。 情報活用能力の一層の充実に向けては、タブレットランクアップ制の再構築を行い、道徳科を中心に各教科で情報モラル教育と操作スキルの習得を目指したカリキュラムを作成した。情報モラルについては、道徳教材に加え、児童の実態に応じたオリジナル教材を用意し、基本操作ではキーボード入力を導入と3年生からタッチタイピングの指導を開始する計画である。 さらに、ロイロノートについては、定期的な研修参加を通じて共有ノートなどの新機能を習得し、今後の授業に効果的に活用できるよう検討を進めていく。

生活指導係	①教師が率先垂範し、子どもの模範となる ②複眼的かつ多面的な角度で子どもを捉え、実態を把握し、指導にあたる ③規律を守り望ましい生活習慣の確立と異学年交流や同学年交流を通し、適切な人との関わり方を醸成する	①児童心得の取り組みを教師が理解し、共通指導として定着を図り、教師の連携や団結力を高めていく ＊児童心得・共通指導の推進を行う係の新設 →児童や教員（初任研・研修）への共通理解に努める ②生活指導の組織を見直し、⑦保健・支援④生活・環境②特別活動の3つの観点から生活指導をする ③児童心得を実践せるために、月1回程度心得について触れる（学年・学級の時間）。主屋活動のみならず、学年間交流の場を与える	教職員に対しては、共通指導の取り組みを定着させるため、定期的な巡回を実施し、情報共有や指導内容の修正を図った。保護者・児童には、生活指導だよりを通じてタイムリーな情報発信を行い、児童心得やM-portalを柱とした学校生活の周知を図った。過去の事案も踏まえ、時期に応じて踏み込んだ内容の発信も行っている。 生活指導に関わる係会では、分掌を三つの観点（保健・支援、生活・環境、特別活動）に分け、責任者を中心に部署を越えて連携した教育活動を展開した。 【保健・支援】児童支援に関する校内会議に加え、教育相談、特別支援教育コーディネーター、学年・生活指導間での協議体制を構築。保健室からの児童情報や指導内容も生活指導で共有し、現場の実態に基づいた改善を進めた。 【生活・環境】学校生活の中で指導のズレが不信感につながらないよう、共通指導の内容を随時確認し、修正した。 【特別活動】学年を越えた交流を促進し、学校生活の充実を図った。行事は2か月前に係会で提案、1か月前に運営・全体発信を行い、計画的な指導と事前準備に努めた。 また、専科教員を含む多くの教職員が関わる本校では、毎週児童情報を共有し、全学年の状況を把握できるようにした。生活指導だよりでも児童の実態を踏まえた心得内容を発信し、学校全体で統一された一貫性のある指導に努めたことで、異学年交流や行事が円滑に実施された。
野外活動室	①学習プログラムを再構築し、ポニー倶楽部のさらなる授業充実を図る ②厩務員個々のスキルアップを図り、授業の質を向上させる ③新規事業を提案する	①ポニー倶楽部の充実≒騎乗時間以外の充実と考えます。ポニー倶楽部では騎乗することをテーマにして授業を実施していますが、授業で稼働できる馬の頭数には限度があり、騎乗していない時間の方が圧倒的に長い授業です。そこで待機時間を充実させると授業の満足度は高まると考え、待機時間の充実を図ります。そのための施策を以下の通りとします A：学年別に応じた自主学習プログラムの開発 →映像教材の作成・更新 B：実馬を用いた体験プログラムの開発 →ブラッシング・うらほり・餌づくり 等々 C：天候不良による屋外活動不可の際の授業内容改良。（赤旗・強風・雷） →カードゲームの更新・談話・室内ワーク 等々 ②厩務員個々のスキルアップを図り、授業の質を向上させる。良質な馬匹を授業に提供することは授業の質の向上に直結すると考えます。内容は主に「馬匹管理」として、定期的に職員内の勉強会を実施します ③新規事業の提案をします。土日などに開催する新規イベントの提案を1件以上することを目標とします	①自主学習プログラムの作成・更新では、1年生向けの馬房掃除ビデオを最新の道具や配置に合わせて改訂し、音声や字幕の調整も行った。また、3年生向けには4年生の飼育当番と連動する「ブラッシング体験」プログラムを新たに作成。さらに、サマースクール用には赤旗（屋外活動中止）時にも室内でポニー倶楽部を身近に感じられる「ポニーコレクション」を作成し、道具や名称を学べる内容とした。 ②勉強会については、蹄・削蹄・予防接種などをテーマに数回開催できたが、その後の職員減により継続は断念せざるを得なかった。 ③新規事業として、卒業生向け講座や放課後プログラム2日目の開講を構想し、企画準備を進めているが、いずれも提案段階には至っていない。 総じて、目標の半数も達成できなかったものの、馬の運動と健康の維持、安定した授業運営、放課後プログラムの継続、さらには年間事故ゼロを実現できたことは大きな成果であった。今後は体制の再整備と企画の実現に向け、継続的な改善を図っていきたい。

1 年生	①自発的・自主的な活動を大切にし、体験学習を重視する。見る、聞く、調べる、遊ぶ、育てる、作るなどの具体的な体験活動を通して、体験に基づいた知識を身につける ②学力の基礎をしっかりと構築し、授業や宿題にきちんと取り組む学習習慣や、学校や家庭での生活習慣を定着させる	①《調べ学習》プロジェクトの学習を通して、調べ学習の技能を身につけ、語彙や知識の獲得、読解力や思考力を高める。調べたものをまとめたり、つくったものを発表したりすることで、自己表現の方法や経験を身につける。また、つくる、さわるなどの体験活動を通して、知識の定着や新しい気づきを得る機会を設ける。また、絵日記や発表などで学習をふりかえり、言語化する場面をつくる 《運動（あそび）の充実》7 時間目の学活を使って、日常的に運動をする機会を設ける。また、仲間との関わり方や遊び方の工夫については、学級レクや生活、体育の授業と連携して、身につけられるようにする。また、学校生活全体を通して、仲間との関わり方を指導する。教師が場面ごとに、児童の気持ちを聞き取りながら、考えを言葉で整理し、自己調整力を育てる ②《自主性・責任感》自分のことは自分でするように指導をする。一度にたくさんの指示を出さず、手本を提示したり体験させたりして、段階的に身につけられるようにする。また出前授業を利用して、清掃の仕方や片付け方を学ぶ機会を設ける。また、係活動で役割を分担し、毎日取り組めるものにする。全員が自分の役割に参加し、学級での生活が成立するようにすることで、自分の役割に責任感をもったり、同じ係の児童と協働して活動したりできるようにする 《けてぶれ》課題に対して自分で目標を立てたり、間違えた原因を分析したりして、 自学自習の技能を身につける。やり方は授業で提示し、宿題で実践する。ノートのとり方についても、授業で提示して共通理解を図る	①プロジェクトでは、調べ学習の基礎として、目次や索引、分類の使い方などの基本的な知識・技能を学び、タブレット（ロイロノート）を用いた検索や成果物のまとめ方も習得した。「わかったこと」と「思ったこと」に分けて情報と感想を整理する方法を身につけた。シンキングツール（同心円やマインドマップ）で、調べるテーマへの関心を高めた。大高緑地公園のディノアドベンチャーで、恐竜の世界観を体験し、その後の調べ学習に活用した。生活科では、朝顔の栽培、芋掘り、麦ふみなどを通じて観察力を養い、収穫物を食材や教材として活用した。狂言や長唄などの出前授業で、日本の伝統文化に触れた。NTTドコモの出前授業で、通信機器の歴史を学び、発表活動を行った。交流活動（給食試食会、祖父母参観、幼稚園との交流、6 年生との給食など）では、主体的な関わりが見られた。日常的に相手に配慮した提案や遊び方が広がり、衝突を避けようとする姿勢が見られた。不満を言語化し、自己解決する姿も増えた。 ②読み書きや発表の機会を積極的に設けた。後期はひらがな・カタカナ・漢字を使った絵日記や3 行日記で、気づきや感想を表現する活動を行った。文章構成や言葉の使い方の指導を通し、考えを順序立てて書く力を育んだ。読書とアウトプットの反復にも力を入れた。後期から「けてぶれ」学習を再開し、児童自身が漢字の学習計画を立てて取り組んだ。算数では、授業内で算数検定対策を実施し、推奨級を受検した児童が全員合格した。前期には早生まれ児童に遅れが見られたが、後期末には学力が平均化した。6 月頃から児童の見通し力が育ち、自主的に係活動や清掃を行い、仲間と協力する姿が定着した。行事や活動に意欲的に取り組み、楽しさや達成感を共有する様子も多く見られた。教師の指導を受け入れ、改善しようとする態度が育ち、授業規範についても多くの児童が理解し、実行できた。
2 年生	①自発的・自主的な活動を大切にし、体験学習を重視する。見る、聞く、調べる、遊ぶ、育てる、作るなどの具体的な体験活動を通して、体験に基づいた知識を身につける ②学力の基礎をしっかりと構築し、授業や宿題にきちんと取り組む学習習慣や、学校や家庭での生活習慣を定着させる	①生活科の授業において、作物を育てたり、町探検をしたりすることを通して、作物が育つ喜びや、身近な地域を知ることの楽しさを知ることにより知識を身につける。・休み時間やレクの時間に友だちと遊ぶ体験を通じて、人間関係の礎を築く ②国語や算数の授業において、机間巡視をこまめに行い、ノート指導を行うことによって授業の受け方の礎を築く。・宿題チェックにおいて、誤字脱字や答え合わせのミスを教師が修正し児童に伝えることによって、宿題や家庭学習の質を向上させる。・けてぶれ学習法を取り入れることによって、児童自身が振り返りや改善を行うための礎を築く	①作物の栽培や町探検を通じて、育てる喜びや地域の魅力を学ぶ体験を行った。遠足（東山動植物園）や出前授業（サイエンス・狂言・陶芸・性教育など）、社会見学（アクア・トトぎふ）も行い、体験を通じた学びを重視した。相手の様子を見て行動する児童が増え、譲り合いや意思疎通の力が育まれた。 ②机間巡視を通じて丁寧なノート指導を実施し、学習姿勢を定着させた。宿題チェックでは誤答の修正や指導を行い、家庭学習の質向上を図った。「けてぶれ」学習法も導入し、児童が自ら振り返る力を育成した。優れたノート例の紹介や声掛けを通じ、特にS授業でのノートの質が向上した。 ③電話連絡は欠席・トラブル対応・学習支援など多岐にわたるが、特に保健室利用の共有が家庭との信頼関係構築に寄与した。ただし、児童ごとの電話件数に偏りがある点が課題である。 ④わかばグランプリでは47名が発表し、家庭の参加率も高く、自己肯定感向上に寄与した。 ⑤教室美化の取組では、ピグマ後の掃除に多くの児童が自主的に参加するようになった。学年掲示物も定期的に更新し、環境整備を図った。 ⑥S授業については、事前文書の配付により導入が円滑に進んだ。
3 年生	①基礎学力の定着の徹底を図るため、テストを指標とした復習を行い、確かな知識の習得を図る ②思考力や応用力をつけていくために、発展的学習にも積極的に取り組む ③ 協働活動を伴う行事を通して人との関わり方を醸成する	①学活の有効活用として算数は計算力、国語は漢字・語彙力、理科は植物やこん虫の基礎知識、社会は都道府県。テスト対策プリントの実施でテスト範囲の基礎レベル ②深めたり広げたり探究し活用する学習、超える学習。○読解力、思考力、判断力、表現力を養う。正確に理解する（読み聴く）、考える、決める、実践する、伝える活動を行う。例 理科 先生の話をおいたり教科書を読んだりする→実験前に予想する→グループでどのように進めるか話し合い決める→実験を行う→結果がどうなったかを伝える。○積極的な課外活動を行う。・習得した知識や技能、深めた学習を実感し、一般社会へ視野を広げる。○超える学習→中学受験を見据えて。・次学年の学習内容につながる指導、単元計画を考える。・次学年や受験レベルを落とし込んだ指導 ③グループワーク強化☆最重要として学校行事だけでなく授業においても、グループで活動する機会を増やす。グループワークの進め方を一から学び、役割分担や意見を調整しまとめるなどのスキルをアップさせる。ものを大切にする心。・定期的に記名確認、教室内の落とし物ゼロ運動→不明品ゼロ、ものに対する意識を強化する。・ものに関わることを授業に取り入れる→ものにはお金がかかっていることから、もの＝お金であること、ものを大切にしない人は友だちも大切にしないくなるなど	①計算力の向上を目指し、朝学タイムや週 1 回の算数個別フォロータイムを実施した。漢字は平日の課題や漢字テスト、理科はカラーテスト、社会では授業冒頭に都道府県プリントに取り組んだ。これらの取り組みにより、算数では冬期講習の総仕上げテストで全校 1 位、国語でも全校 4 位の成果が出た。 ②知識を実践的に活用し、学びを深めた。理科では里山観察や実験、社会では校内インタビューを行うなど、体験的な活動を通して理解を深めた。また、社会見学では中部大学を訪問し、水と生態系のつながりやミジンコの働きといった未習内容についても学んだ。 ③学年全体で 6 班体制をとり、各班に 2 名のリーダーを配置して、行事だけでなく、体育・音楽などの授業や教室移動も班単位で行った。年間を通してグループ活動を重視し、トラブル時にも協力して解決を図る姿勢が育まれた。 総じて、学年目標「心つながる」のもと、グループ活動の充実が学級のまとまりや個々の成長、学年全体の一体感につながった。特に、学校祭での 3 クラス合同による音楽劇はその象徴的な成果である。一方で、金銭や物に関する意識づけや指導が不十分であった点は、今後の課題として改善が求められる。

4 年生	①基礎学力の定着の徹底を図るため、テストを指標とした復習を行い、確かな知識の習得を図る ②思考力や応用力をつけていくために、発展的学習にも積極的に取り組む ③ 協働活動を伴う行事を通して人との関わり方を醸成する	①基礎学力の定着として、児童97名の学年での習熟度のクラス編成だと40名以上のクラスが発生する可能性あり。対策としてクラスについてS1を2つ、S2を1つに設定。S1・2クラスを均等に成績別に分けていく。意図的にS2は少人数に設定。イメージS1は35名前後。S2は25名前後。S 2を少なくすることにより、きめ細かい指導がやりやすい環境を作る ②思考力・応用力として、他教科とのつながりや公立中高一貫校のン問題形式に対応した定期試験の問題作り。プロジェクト（SDGS）、宿泊学習（世界遺産）などの活動を通じて得た好奇心を掘り下げ学習することで生きた知識を身につけさせる。プロジェクト…作る責任・使う責任。例：へちまの栽培→へちまからたわしなどを作成→家庭で使用。宿泊学習…白川郷。例：合掌造りが定着したわけ、「結の心」への理解 など ③人との関わり方を醸成として、現状：対人スキルにおいて上手にかかわれる児童が多い。今年度転入生3名を迎える。転入生3人に対して積極的ににかかわれる機会を増やし、4年団の一員として1年時からいる児童と遜色ない受け入れを児童ができるようにする。児童会（後期）、主屋活動を通じて上級生としての立ち振る舞いや学校を作っているという意識作り→クラスをよくしようとする意識作り（クラス自治）。学活、レクの運営を一部児童に任せる、給食、掃除など指示がなくてもできるなど。よかったところを積極的に評価することで自信と誇りを持てるようにしていく。学年集会での先生賞や普段の行動への声かけなど	①【基礎学力の定着】 S授業をS1①・②、S2のクラス編成で1年間実施した。第1回実力テストでは偏差値60以上が15名（約16％）、40以下が8名（約8％）だったが、2月の実力テストでは60以上が22名（約23％）、40以下が9名（約9％）となり、学習内容の難度が上がる中で上位層の増加が見られ、一定の成果があったといえる。習熟度に応じた宿題の調整や、小テスト・計算トレーニングの継続も基礎定着に寄与した。算数検定（8級）では全員合格という結果を残した。学習内容の難化、量の増加に対応した個別対応の工夫が課題である。 ②【思考力・応用力の育成】 「作る責任・使う責任」をテーマに、調べ学習と体験活動を組み合わせた探究型学習を展開した。猪子石ゴミ処理場やガスエネルギー館、名古屋市科学館などの見学を通し、環境やエネルギー問題を実感して学んだ。家庭で不要となったTシャツを使ったエコバッグ作成や、バガス容器の実験なども行い、3Rの理解や科学的思考の育成につなげた。タブレットを活用した個人調べや成果物作成を通じ、主体的な学習姿勢が育まれた。 ③【協働活動を通した人間関係の醸成】 宿泊学習や学校祭、ネイティブ講師との交流など、他者との関わりを重視した活動を年間を通して行った。サマーフェスティバルには96名中60名以上がボランティアとして参加し、主体的に役割を果たした。転入生3名もスムーズに学年に馴染み、周囲の児童の支援が大きく作用した。児童会選挙では、後期に14名が立候補するなど、学校づくりへの意欲も高まった。表彰の機会を多く設け、自己肯定感を育んだ。 【今後の課題】 成長段階に伴う反抗期や他者との距離感の課題が顕在化してきており、対人トラブルも増加傾向にある。人との関わり方や距離の取り方について、継続的な指導が必要である。
5 年生	①受験を意識した内容の濃い授業や進学塾名進研との連携を行いながら、基礎学力に基づく、応用的・発展的な高いレベルでの力を身につけ、志望校合格を目指す ②自律的に学習に取り組む姿勢を養う ③上級生としての自覚と節度ある生活習慣の確立、卒業後も社会のリーダーとなれるよう、積極的に周囲の状況や他者の気持ちに寄り添える主体性と協調性のある児童を育成する	①学習規律を守って授業を受けさせる。そのために、学習規律や学級のシステムは丁寧に伝える。その後は時間がかかってもいいので、何度もくり返して定着させる ②日々の学習や活動がなんのためになるのかを一緒に考えたり、できるようになったことを具体的に褒めたり、いけないことは理由を添えて伝える。そして、それぞれが目標を持って前向きに学習に取り組めるようにする ③高学年として、当たり前のことを当たり前に行う。従来のように「言われたことを行う」という段階から、「自ら考える」ことができるようにする。また「正しい行動」を考えるだけでなく行動を伴う児童の育成を目指す。その際に、クラスでグループワークを取入れ、協調性も養う	①4月には、学級のシステムや学年目標、担任が1年間を通して意識してほしいことを明確にし、児童に丁寧に説明した。チャイム前の着席や授業のあいさつなど、基本的な生活習慣について繰り返し指導を行って定着を図った。年度当初から意識を高めたことで落ち着いて学習に取り組む姿が見られるようになった。 ②「ミッション・インポッシブル」や宿泊学習、学校祭といった行事の前に学年集会を開き、行事の意義や身につけてほしい力、教師の思いを共有した。その結果、学年全体で共通の目標を持って活動に取り組むことができ、他学年の教員からも高い評価を受けた。 ③遠足や宿泊学習ではグループ活動を取り入れ、協力して行動する力を育てた。遠足前に係会を複数回実施し、各係が責任を持って役割を果たせるよう準備を重ねた。宿泊学習では、各部屋単位で時間を守ることや、整理整頓を意識させた。失敗があった際には、何が問題で、どのような迷惑をかけてしまうのかを丁寧に伝えた。すぐに行動が改善され、児童の成長を実感した。
6 年生	①受験を意識した内容の濃い授業や進学塾名進研との連携を行いながら、基礎学力に基づく、応用的・発展的な高いレベルでの力を身につけ、志望校合格を目指す ②自律的に学習に取り組む姿勢を養う ③上級生としての自覚と節度ある生活習慣の確立、卒業後も社会のリーダーとなれるよう、積極的に周囲の状況や他者の気持ちに寄り添える主体性と協調性のある児童を育成する	①子どもたちの実態に合わせた形でS授業、宿題を実施する。学年会で、各教科の情報を共有し、必要であればすぐに実態を確認し、改善を行う。また、アフター校受講者も多くいるため、アフター校の先生方とも情報共有できる機会を作る ②時間割の都合で可能な限り、最低週1回、個別学習タイム&質問タイムの時間を確保する。個々の力に差がある分、個々に自分の目標に合った形で集中できる環境づくりを行う。ただ、学習させるだけでなく、一人一人とコミュニケーションをとりながら、アドバイスを送り、できる限りの個別最適化を目指す ③学校のために活動する「委員会」、学級のために活動する「係」に加えて、学年のために活動する「部活」を新しく設定。学年のリーダーとして、担当教員とともに学年のために活動する経験を積ませることで、将来的に積極的に周囲の状況や他者の気持ちに寄り添えるようになっていくことを期待している。また、最上級生として、名進研小学校生の代表という意識は常に持たせ、1年生のお手伝いや、主屋での活動など、主体的に行えるように声をかける	①宿題や授業形態、夏期・冬期講習、補習の実施にあたっては、その都度子どもたちにとって最適な指導方法を学年団で丁寧に協議し、納得のいく形で実行することができた。その積み重ねが、東海中16名合格（過去最多）、南山女子部6名合格（最多タイ）という成果につながったと考えられる。学年会では児童情報を共有し、教科ごとの課題も随時報告。直前期には、各教科で強化が見込まれる児童を担任と連携して把握し、声掛けなどの支援を行った。アフター校とは、面談前に情報を共有する時間を設けることはできたが、受験直前期にはより密な連携をすることが今後の課題である。 ②毎週1回ランチルームで自習時間を確保し、4月から継続的に実施したことで、自然な学びの時間として定着した。この時間を活用し、教師から声掛けや質問をし、個別対応も丁寧に行った。プレテストの結果返却時にも、全員に必ず一言添えることを学年団で意識し、単なる返却に終わらない指導を徹底した。 ③部活動については、一部の児童に可能性は感じられたが、「休み時間を削る」との理由から参加希望が少なかった。一方、1年生との交流給食には全員が参加した。上級生としての自覚が育ち、登下校でも、普段は目立たない児童が低学年との関わりで面倒見のよさを発揮する例もあり、異学年交流は高学年の自己肯定感を高める大きな機会となった。